色と酒

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
色と酒

【Ｎコード】
Ｎ３７０２Ｄ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
時は大正。色の道を楽しむ太田と酒の道を楽しむ友人。果たして二人は何処までそれぞれの道を歩むことができるのか。大正のハイカラな空気の中でのお話です。

第一章

色と酒

大村潤一郎の名前を知らない人間はこの大阪にはいない。ただしあまりよくない意味でだ。

「今日は男か女か」

「どちらにしても好きな御仁ですわ」

大阪で至るところでこう言われている。明治が終わり大正になってハイカラになったと言われている大阪においてとかく浮名の絶えない男であった。

背は高く顔立ちは実に立派である。京都の大学を出て今は文士をしている。だが文士としてよりも色事の方で有名な男であった。

「君、やっぱりあれだよ」

いつも遊んだ後で友人を酒場に連れ出しては楽しげに言うのである。

「人間遊ばないとね。駄目だよ」

「それは男とかい？女とかい？」

「どちらでもだよ」

彼は陽気に笑ってこう答えるのが常であった。

「いいかい、人間はこの世を楽しむ為に生きているんだ」

「楽観的な人生哲学だね」

「少なくともショーペンハウアーとはいかないね」

十九世紀ドイツの哲学者である。所謂厭世哲学で有名だ。元々キリスト教には多分に厭世的なものもあるが彼はそこに東洋の思想の影響を受けたと言われている。

「あんなものは願い下げさ」

「そうは言ってもドイツでも遊んだのだろう？」

「ドイツはちょっとね」

彼は海外留学の経験もある。頭が切れたので将来を期待されての

ことである。しかしそこでも遊び倒していたという御仁なのだ。
「美人が少ない」
「そうなのか」
「ついでにイギリスも少しね」
そう述べて顔を曇らせる。見れば今彼が飲んでいる酒はドイツのものでもイギリスのものでもない。それが酒にも出ているようである。
「いいとは言えないね」
「じゃあどの国がよかったんだい？」
「ヨーロッパじゃイタリアだね」
彼は急に顔を明るくさせて述べた。
「それかフランスかスペインか。やっぱりそうしたところに限るよ」
「また随分とドンファンな好みで」
「ドンファン！？褒め言葉だね」
彼にとってはそうである。そのイタリアから輸入された高価なワインを楽しみながら友人に答えてみせるのであった。
「願ってもない言葉だよ、それは」
「日本人なのにか」
「日本人だってドンファンになれるんだよ」
グラスを掲げて楽しそうに述べる。
「しかもだ。西洋人は女だけだが」
「日本人は男もか」
「そうさ。それを教えてやる」
ここで酒を口に含む。飲み方も見事だ。
「世の中にね」
「この大阪でもない」
「いい場所だねえ、ここは」
酒場に入ってから一番の笑みを見せる。どうやら大阪という街がいたくお気に入りのようである。
「女も男も愛嬌があってね。実に可愛い」

「可愛いのか」
「人間は可愛いのが一番さ」
そう言うのだった。
「昨日会った少年もね。いいものだった」
「昨日は男だったのかい」
「違うね、それは」
その問いはすぐに否定する。だが男を相手にしたのは事実であるからこれはかなり矛盾する言葉だった。友人はそれに突っ込まざるを得なかった。
「しかし君は今」
「男もだよ」
笑って返してきた言葉はこれであった。
「わかるかい？僕は一日一人じゃ気が済まないんだ」
「何人もかい」
「昨日は朝に一人、夕方に二人」
こう語りはじめた。
「そして今日の朝までで一人とゆっくりと。そんなところさ」
「凄いね、よく身体が持つものだ」
「人間好きなものはどれだけでもやれるものさ」
笑っての言葉であった。
「それに僕は幸い身体は頑健だ」
「それに任せてなんだね」
「そういうことさ。実は今日も」
「今日はどれだけ遊んだんだい？」
友人が飲んでいるのはビールだった。イギリス風の洒落たバーの中で楽しく飲んでいるがどうにもこの大村がやけに目立っている。少し見ただけではとびきりの男前だからそれも当然であるが。それでもかなり目立っていたのであった。
「今日は二人だね」
「今までででかい」

「女だけだったよ」
少し寂しげに語る。
「全く。男が欲しいというのに」
「じゃあ探せばいいさ」
友人はビールを飲みながら大村に述べた。
「探せばきっと見つかるだろう」
「そうであって欲しいよ」
大村はわざと溜息を出して言うのであった。
「全く。どうしたものやら」
「そんな日も多いんだろう？」
友人はその溜息にあえて乗った。そうして彼にこう問うたのであった。

第二章

「男だけ、女だけという日も」
「勿論さ」
大村も大村でそれを認める。だがここであえて言うのであった。
「けれどそれを狙っている日はいいけれどそうじゃない日だと」
「困るのかい」
「当たり前じゃないか」
続いてそう述べる大村であった。
「だってそうだろう？望んでいるものが手に入らない」
「人生じゃよくあることじゃないか」
友人は達観した言葉を彼に告げた。確かにこれは真実の一つである。何でも望み通りのものが手に入るかというと決してそうではない。そうした辺りは世の中というものは非常に無常なものであるのだ。
実はこれについては大村もわかっている。わかってはいてもそれでも不満に感じて仕方がない、彼はそうしたタイプの男であるのだ。
「別に一日位は」
「わかっていないな」
彼は何故かここで自分が達観した笑みを見せて友人に述べた。
「こうした遊びは望むものを手に入れてこそだ」
「そうなのか」
「そうさ。カサノバだってそうじゃないか」
十八世紀欧州を席巻した色事師である。その派手な人性はもう伝説にすらなっている。
「色を求める者は求めるものを手に入れてこそ」
「本物だっていうのか」
「その通り。だからだ」
彼は不敵な笑みにその笑みを変えた。そうして宣言するのだった。

「今日もきっと。男を抱く」
「僕は遠慮しておくよ」
「ああ、そこは安心していてくれ」
彼は友人には笑って言葉を返した。
「僕は自分の男友達、しかもそっちの趣味はない人間には手を出さないよ」
「それは有り難い」
「それ位の節度は持っているさ」
笑って述べる。彼とて無差別ではないということであった。
「さて。だからだ」
「行くのかい？」
ワインを完全に空けて席を立とうとする大村に問うた。
「もう」
「気付け薬は飲んだし」
ここではワインのことである。彼は無類の酒豪でもある。その彼にとってはワインも水と全く変わらないものであったのだ。
「これで英気は養ったしね」
「そうか」
「君も途中で付き合うかい？」
「いや、僕はいい」
友人はそれは断った。
「暫くここでゆっくりしていくよ」
「君は相変わらず酒か」
「ああ、こっちの方がいい」
友人はこう大村に答えた。
「じゃあな。今日はこれで」
「ああ。それじゃあな」
大村はこの友人と別れた。そうしてそのまま梅田の繁華街に出た。夜の大阪はみらびやかでありそれでいて何処か泥臭い。大阪の雰囲気をそのまま漂わせていた。

彼はその中を立派に着飾って進む。進みながら周りに目をやり続けている。そうして男を探していた。自分の眼鏡に適う男を。
だがどうにもそうした相手は見つからなかった。何故かこの日に限ってそうした相手が見当たらないのであった。彼はこのことにシニカルな笑みを浮かべるのだった。
「こんなこともあるかな」
焦りはしない。しかし先程の友人との会話を思い出すのだった。望むものはいつも手に入るわけではない、彼はこの言葉を思い出してまたシニカルな笑みを浮かべるのだった。
「やれやれ。あの言葉の通りかもな」
その笑みのまま懐から煙草を取り出して火を点ける。ゴールデンバットはほろ苦くまるでチョコレートのようである。本体はそんな味はしない筈なのにそうした味がすることに彼は不思議なものを感じた。そうしてそのゴールデンバットを味わいながら思った。
「これも。望まないことだろうな」
そう考えて夜のネオンを見る。赤や青の派手な光の下で人々の陽気な笑い声が聞こえる。そこには彼の愛するありとあらゆるものがある。彼もいつもはその中にいる。だが今日に限ってはどうにもそこから阻害されているのであった。
その阻害も感じながら煙草を吸い続ける。煙草が終わりに近付いたところで彼はふと考えを変えたのであった。
「そうだな」
ふと思いついたのだった。
「ここは女にしておくか」
妥協であった。しかしそれでもよかった。
女も好きだからこそ。こうしたところで彼は実に思い切りがよかった。そうしたところも彼を一代の色事師にしていたと言える。彼はすぐに女を探しはじめた。
「いなければいないで」
彼は思った。

「そうした店に行けばいいしな」
そうも考えながら女を探す。そうして見つけた一人の女と夜の街に消えた。そうしてネオンの中で一夜限りの行きずりの愛を楽しむのであった。
その次の日の夜。彼はまた昨日の友人と飲んでいた。場所はやはりあのバーであった。
「何だ、妥協したのか」
「そうさ」
彼は平気な顔でそう答えた。
「そういう日もあるものさ」
「また随分簡単に妥協したな」
「妥協もこの道には大事だからね」
そう述べるが確かにこれもまた真実であった。望むものが得られなければ他のものを望む。そういうことである。
「別に悪くはないんだろう？」
「悪いとは一言も言わないよ」
友人もそれは否定しない。
「女もこれもそうだろう？」
そうしてここで自分が飲んでいるビールを見せるのであった。コップに入っているそのビールは程よい具合に泡を出していた。
「何がいいかは特にいえないものじゃないか」
「そういうことだね。昨日の女もよかった」
「そんなにか」
「うん、楽しい夜を過ごさせてもらったよ」
大村は昨日と同じワインを持っていた。そのワインを飲みながら楽しげな顔を見せている。

第三章

「男がいなかったのは残念だけれどね」
「まあ楽しい夜を過ごせたらそれでいいんじゃないのかい？」
「その通りさ。さて、今日は」
「男かい？女かい？」
「どちらでもいい」
何も考えていないといった感じで答えたのであった。
「どちらでも。気に入った相手がいれば」
「それでいいのか」
「ああ、今日はそれで行く」
彼はこう答えた。
「それでね」
「そうか。じゃあ君の望むようにすればいい」
「そうか」
「少なくとも僕が口を挟むことじゃない」
友人はそう述べた。いささか突き放したような言葉であったが実際は彼の考えを尊重しているのである。彼の人間がわかっているからだ。
「好きにすればいいさ」
「酒と同じでだね」
「その通り。君はワインで僕はビール」
自分達がそれぞれ飲んでいる酒を出してきた。
「それでいいじゃないか」
「じゃあこのまま飲んでいくか」
「それで今日はどっちにするんだい？」
「ああ、そっちか」
大村は友人が何を言いたいのかわかった。それは彼の本来の道についてであった。

「そっちは。そうだな」
「どっちだい？」
「どっちでもいい気分だな」
彼は目線を少しだけ上にやってそう述べた。考える顔であった。
「正直言って」
「そうなのか」
「そうさ。だから今はこれを飲んで誰か気に入った相手にするよ」
「こだわりは捨てたのかい？」
「いや、それはないよ」
こだわりを捨てたわけではない。色道も結局はこだわりなのだ。それについてもわかっているからこそ否定したのである。大村もまたこだわりの男なのだ。
「やっぱりね。眼鏡に適う相手じゃないとね」
「それが男か女かっていうだけで」
「そういうことさ。とにかくいいのが見つからないとね」
彼は述べる。
「そのこだわりも発揮されはしないものだけれどね」
「難しいな、それはまた」
「いや、決して難しくはないよ」
それもまた否定する。そうしてここでも彼の考えを述べるのであった。
「楽に考えればいいんだ」
「楽にかい？」
「そう、楽に」
大村は述べる。
「こだわりはあってもそれに固執することなくね」
「楽にやっていくのか」
「あとは。そうだな」
彼はまた考える顔になった。そうしてまた自分の考えを述べるのであった。

「あれだね。好きな相手の好みを増やすこと」
「好みをかい」
「そうすればより楽しめるようになる」
笑って友人に語る。実際に彼は女に関する嗜好はかなり広いものがある。しかも男についてもである。どちらもほぼ誰でもいけるといったレベルでである。
「そういうものさ」
「酒と同じか」
「大して変わりはしないね」
言われてその通りだと心の中で思った。実のところ酒についても色についても結局は同じなのだと。こだわりは持つべきだがそれに固執してはかえって道が狭くなり充分に味わえなくなる。彼は今そのことにも気付いたのだった。
「まあ僕は酒に関しては」
「ワインが一番かい？」
「うん」
友人に対してまた頷いてみせた。
「やっぱりね。ただし」
「ただし？」
「ワインといっても色々あるものさ」
くすりと笑って友人に告げた。その顔がまたどうにも知性と無邪気が一緒にあり実に魅力的だ。彼のこうした笑顔が男も女も魅了するのだろう、友人はその笑顔を見て思った。
「赤もあれば白もある」
「そうだね」
「その赤も白も一つじゃない」
それについても言及する。
「かなりの種類があるからさ。それを一つ一つ楽しんでいくことこそが」
「楽しみなんだな」

「そうさ。それを考えるとワインだけでいい」
「成程」
友人は今の彼の言葉にまた頷いた。
「だから君はワインだけでいいんだ」
「時々ビールも飲むさ」
少し笑ってこう述べた。これは本当のことである。
「日本酒もね。けれどメインはやっぱりワインだ」
「色と同じで」
「そう。そう考えるとわかりやすいな」
彼自身それを感じていたからこその言葉だ。

第四章

「ワインは色さ」
「面白い例えだ」
「ビールや日本酒は何なのかわからないけれど少なくともワインはそうだと思う」
そう述べる。
「だからこそ好きだ」
「そうだったのか」
「それに今気付いたよ」
また随分とぼけていてそれと共に気障な言葉だったが妙に合っているのもまた彼であるからこそであった。友人はそんな彼に内心で嫉妬すら感じていた。少なくとも羨ましくはあった。そういう言葉を出して絵になるというのだから。
「自分でもね」
「毎日でも飽きないかい」
「そうだな」
それについても気障な言葉で返してきた。
「飽きない。色もワインも」
「赤はどちらかな」
友人は不意にそれを尋ねてきた。
「赤ワインはどちらだい？」
「女だろうな」
大村にとって赤ワインはそれであった。
「それで白は男だ」
「そうか」
「赤も白も好きだ。同じ位同時に愛している」
いささかフランスめいた言葉だった。友人もそれに突っ込みを入れる。

「おい、今の言葉は」
「何かあるのかい？」
「フランスの昔の王様の言葉だったぞ」
「そういえばそうだったな」
大村もそれを言われて思い出した。ブルボン朝の王であるルイ十五世の言葉である。彼はフランス一の美男とまで言われた顔の持ち主でありそれと共に女にかけては比類なき造詣の持ち主であった。その彼の言葉なのだ。また彼は女はまず胸からはじまるとも言っている。
「それを考えれば深い言葉だ」
「そうかね」
「そうさ。まああの王様は男には興味がなかったようだが」
「君は違うと」
「ここであえて言うがね」
彼はまたしても真剣な顔になった。その顔で述べてきた。
「西洋人は色のことには何もわかっていないんだ」
「そうなのか」
「そうさ。彼等は男色を嫌う」
これはキリスト教のせいである。大村はそれを批判しているのだ。
「それこそが色について何もわかっていないことなんだ」
「男も愛してこそか」
「我が国では昔からそうだっただろう？」
「確かに」
これもまた事実である。日本においては男もまた普通であった。フランシスコ＝ザビエルが日本にはびこる恐るべき悪徳として批判した歴史も残っている。平安時代の貴族達の間でも男同士の恋愛は普通であった。
「織田信長公然り」
とりわけその道では有名な人物である。
「武田信玄公然りだ」

彼もまたそちらを楽しんでいた。だからといってそれで批判されたこともない。
「何が悪いのか。それを嫌うというのは色を半分しかわかっていないということだ」
「そのもう半分もわかってこそ」
「本当の色だ」
彼はそう主張した。
「あの連中はそんなことは完全に忘れている。いや」
「いや？」
「最初からわかっていないな」
ワインを口に含んでから高みから見下ろすように述べた。
「結局はな」
「忘れているって言葉も気になるがわかっていないのか」
「ギリシアがあったじゃないか」
「ああ、あれか」
ここで言うギリシアとか古代ギリシア文化である。言うまでも泣く彼らにとっては文化の源泉の一つである。言うならば柱の一本なのである。
「あの時代は男色は普通だったな」
「そうらしいな」
これはギリシア神話にもはっきりと書かれている。男同士の恋愛が普通の文化であったのだ。ここは日本と同じであるが当然違う部分もある。大村が言うのはその違う部分なのである。
「しかし。そこだ」
「そこか」
「彼等は女を嫌ってだから男を愛していた」
「それは君とは違うね」
「全く違う。それもまた僕に言わせれば愚だよ」
ワインと一緒に頼んであったチーズを食べる。その独特の歯触りと匂い、淡白な味を楽しんだ後でまたワインを口に含むのであった。

「実に愚かだ」
「女も同時に愛してこそか」
「そうさ。そんなことをするのなら男も止めた方がいい」
そう彼は持論を述べる。
「何の意味もないことさ」
「だから彼等は色がわかっていないのか」
「いいかい、君」
ワインのグラスを右手に持ち。友人に対して述べる。

第五章

「西洋人は偉そうにしているがその実は大したことがない」
「大したことがないのか」
「所詮はこの数百年の連中だ。それまでは未開の連中だったじゃないか」
「そうかな」
「そうさ。少なくとも我々みたいに長い間穏やかに文化を育んできたわけじゃない」
　彼等の戦乱と抗争の歴史ついて言っているのだ。無論日本とてそれは同じなのだが決定的なところで西洋とは違う、彼はこう考えていた。
「自分達とは違う人間を殺して殺されてだった。それは今もか」
「まあそうだね」
　友人も彼のその言葉を認めた。
「歴史を見ればね。絵画にもそんなのが多いか」
「そうさ。男を愛していて捕まる世界だ」
　イギリスの作家オスカー＝エシルドのことを言っているのである。彼は貴族の青年との同性愛により裁判にかけられ入獄する破目になった。これはこの時代どころか何時の時代でも日本においては考えられないことである。大村にとってもそうだ。
「馬鹿げている」
「あれは同意だね」
　友人もこれには同じ意見であった。
「信じられない話だ」
「あの程度のことを認められないでよく文明だどうだと言える」
　その文明の象徴とさえ思われていたワインをあおり言い捨てる大村であった。
「戯言だ。そんなものは」

「我々の方がその点はいいかな」
「少なくとも僕達の方が色がわかっているね」
大村は太鼓判を押した。
「そしてその中でも」
「君はか」
「僕はこの道に生きる」
はっきりと言い切った。
「果てには何があるのかわからないがね」
「鼻が落ちるか溺れて死ぬか」
梅毒や衰弱のことである。色に嵌まるとどうしてもそういったものから離れられない。それが因果というものなのだ。
「そうなってもいいんだね」
「望むところさ」
彼はその鼻を得意そうに鳴らして言うのだった。
「そんなこともね。鼻が落ちてやっと一人前だ」
江戸時代はこう言われていた。梅毒になってこそようやく遊んでいるとさえ言われていたのだ。なお江戸時代は梅毒で命を落とす者も多かった。
「覚悟のうえさ」
「それで死ぬのもか」
「ハイネみたいでいい」
こうまで言い切る。ハイネは梅毒で倒れそのまま息を引き取ってしまった。自分が寝ているそのベッドを褥の墓場と呼び最後まで鉛筆を持とうとして死んだのだ。
「それも道の行く先さ」
「達観もしているのか」
「意外かい？」
「いや」
不思議にそれは意外に聞こえなかった。彼らしいとは思っても。
「そうは思わないね」

「そうか。じゃあこのまま行く」
「君の好きにすればいい」
友人は彼の背中を叩くようにして述べた。
「望むようにね」
「最初からそうするつもりさ」
「今日もだね」
「勿論」
不敵な笑みを浮かべてその問いに答えたのだった。
「さて。今日は男か女は」
「力を抜いているんだね」
「道に力はいらないさ」
その笑みのままで彼に述べる。
「そんなものはね」
「こだわりは必要でもかい」
「そう。それでも」
一呼吸置いて。それからまた出す言葉は。
「固執はしない」
「あくまで柔らかくかい」
「硬くて遊べるかい？」
そうも言うのだった。
「遊べないだろう？そういうことさ」
「わかりやすいね」
「遊びはわかりやすいんだ。けれど道だから」
「行くには覚悟がいるのか」
「そういうことさ。君にとってそれは酒だな」
そのビールを見て言う。見れば彼はもうかなり飲んでいた。顔が真っ赤になっている。
「まあね。一生飲んでいたい」
「身体を壊してもかい」
「これで壊れるなら本望さ」

大村と同じことを言う。違うのはその対象だけであった。
「僕もそう思うよ」
「いい言葉だ。しかもいい顔になっているよ」
「それでもそっちの遊びはしないよ」
「別にいいさ」
大村はそれをよしとした。別にそれで構わなかった。
「君がそっちの趣味はないのもわかってるしな」
「そうか」
「じゃあ。今日は」
「そろそろ行くのか」
「うん」
にこりと笑って友人に告げる。
「これでね。それじゃあ」
「また話を聞かせてくれよな」
こうして大村はその場を後にした。友人はそれを見送って思うのだった。
「酒にしろ男にしろ女にしろ」
道について思う。
「どれにしろこだわりを持ってしかも柔らかくか。成程な」
そう呟いてビールを飲む。明日また大村から聞く話は何だろうと思いながら。それを妙に楽しく思いながら酒を飲み続けるのであった。

色と酒　　完

２００７・１１・１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3702d/

色と酒

2010年10月8日13時45分発行